子どもの意図判断におけるバイアスが社会性に及ぼす影響

ポジティビティバイアスに着目して

○佐藤友美

(中部大学人文学部)

キーワード: 意図判断, ポジティビティバイアス, 社会性

Influence of positivity bias in children's intention judgment to children's sociality

Tomomi SATO

(College of Humanities, Chubu University)

Key Words: intention judgment, positivity bias, sociality

目 的

他者の行為が故意か偶発的かを正しく判断する能力は、他者との良好な関係を構築したり維持したりするうえで重要である (Crick & Dodge, 1994)。例えば“自分が作っている積み木の城を相手が壊した”など、自己の所有物を相手が破損したとする。相手がわざとであれば非難すべきであるが、うっかりであれば酌量の余地が生じるであろう。にもかかわらず誤って強く非難してしまうと、相手との関係は悪化しうる。先行研究では、7歳以下の子どもは意図を結果に基づいて判断することが示されてきた (e.g., Schult, 2002)。つまり、城が壊れれば相手は“壊そうとしていた”と判断してしまう。これに対して Sato and Wakebe (2014) は、意図の結果に基づいた判断にはポジティビティバイアスも影響を及ぼしていることを示した。これは、子どもは他者の特性を過度に楽観的に解釈する傾向のことである (Lockhart ら, 2002)。つまり他者の行動に関わらず、“壊そうとはしていなかった”と判断する傾向である。

しかし、このようなポジティビティバイアスが意図判断に影響を及ぼしている理由については、これまで明らかにされてきていない。自己の能力に対するポジティビティバイアスは自己の学業における学習に適応的である (Lockhart ら, 2002) ことから、他者の行動に対するポジティビティバイアスは社会的やりとりにおいても適応的である可能性がある。したがって、結果に基づく意図判断にポジティビティバイアスが影響を及ぼすことで、他者を過度に敵意的に解釈することを弱め、他者との良好なやりとりを促す可能性が考えられる。さらに、幼児においては自分を阻害した相手を許すことが困難である (早川・荻野, 2009) ように、社会的葛藤に対応する社会的スキルが未熟であるため、ポジティビティバイアスによる判断をすることで自分を阻害しようとしているという意図判断を回避し、他者との良好なやりとりを促している可能性が考えられる。

そこで本研究では、ポジティビティバイアスが社会的スキルの未熟さを補完し、他者との良好な関係性の構築に寄与しているのかを明らかにすることを目的とする。そこで、a) 社会的スキルを獲得していくにつれて、意図判断におけるポジティビティバイアスは減少していくだろう、b) 他者との対人場面における意図判断の方が非対人場面における意図判断よりも、ポジティビティバイアスは強いだろう、という2つの仮説を検討する。

方 法

実験参加者 1年生、2年生、3年生、4年生の男女計21名。
実験計画 学年×場面 (対人場面・非対人場面)。場面は被験者内計画。

材料と手続き 子どもを1人1人別室に呼び、15分程度の面接実験を行った。はじめに WISC-IV の類似・単語・理解課題を行い、言語能力が標準の範囲であることを確認した。次に

意図課題として、対人場面は、主人公と主人公に影響を及ぼす他者の行動とその結果 (例：主人公が積み木でお城を作っているが、そこに主人公の友だちが来て積み木を足でけり、お城が壊れる) を紙芝居で見せ、他者の意図を判断させた (例：お城を壊そうとしたか)。非対人場面は、主人公の行動 (例：主人公が積み木でお城を作っており、途中で積み木を足でけり、お城が壊れる) を紙芝居で見せ、主人公の意図を判断させた。その後両場面において、意図を判断した動作主が別の場面 (例：友だちが花に水をあげたいがじょうろがない) ではどのような行動をするかについて判断させた (例：じょうろを貸すか貸さないか)。同様の課題を8課題行なった。次に、心の理論課題 (一次信念・二次信念) を行なった。最後に、社会性を測る質問紙 (ソーシャルスキルの調査 (渡辺, 2007)) に回答してもらった。

結 果

初めに、対人場面における年齢の比較をしたところ、年齢の主効果は有意ではなく、どの年齢にもポジティビティバイアスが見られることが示された ($F(1,23) = 20.91, p < .001$)。同様に、非対人場面においても年齢の差はなく、どの年齢にもポジティビティバイアスが見られることが示された ($F(1,23) = 48.32, p < .001$)。また、対人場面と非対人場面でポジティビティバイアスの強さを比較したところ、場面の主効果は由ではなく、どちらの場面でも同程度にポジティビティバイアスが見られることが示された。次に、各場面におけるポジティビティバイアスの程度と社会的スキルとの関連を検討した。年齢と言語能力を統制した偏相関係数を算出したところ、対人場面におけるポジティビティバイアスは、正の相関の傾向 ($r = .36, p < .10$) が見られたが、非対人場面においては相関は見られなかった ($r = -.20, n.s.$)。

考 察

本研究では、意図判断におけるポジティビティバイアスの役割を明らかにするため、a) 社会的スキルを獲得していくにつれて、バイアスが減少するのか、b) 対人場面の方が非対人場面よりもバイアスは強いのか、について検討した。その結果、年齢にかかわらず、意図判断においてポジティビティバイアスが影響を及ぼしており、対人場面でも非対人場面でも、同等にポジティビティバイアスが影響を及ぼしていた。しかし、社会的スキルと関連が見られたのは、対人場面におけるポジティビティバイアスのみであったことが示された。このことから、対人場面におけるポジティビティバイアスが、社会的スキルを補完しており、他者との良好な関係性の構築に寄与している可能性が示唆された。

主要引用文献

Sato, T. & Wakebe, T. (2014). How do young children judge intentions of an agent affecting a patient? Outcome-based judgment and positivity bias. *Journal of Experimental Child Psychology*, 118, 93-100.